

ウメ・モモ・スモモなどを加害する

「クビアカツヤカミキリ」に注意してください

クビアカツヤカミキリは中国大陸原産の外来種で、EPPO（欧州および地中海沿岸地域における植物保護のための協力を担う政府間組織）の報告書（2016）によると中国、日本、韓国、北朝鮮、モンゴル、台湾、ベトナムで被害の報告があるようです。欧米では、ドイツ、イギリス、アメリカで国外から運ばれてきたコンテナなどで発見されました。この時は、定着しなかったようです。その後ドイツ、イタリアで野外における被害が確認されましたが、現在は根絶したようです。

また同書では中国における主要な寄主植物として、サクラ属植物（モモ、アンズ、セイヨウモモ、セイヨウミザクラ）が記載されています。この他、インドセンダン、タケの1種、アメリカガキ、オリーブ、ギンドロ、シナサワグルミ、ザクロ、ヒメツバキなどが報告されていますが、被害の程度は不明とされています。

国内では平成24年に初めて愛知県のサクラとウメで被害が確認されました。その後の各都府県での被害の確認状況は表1のとおりです。

表1 国内での被害確認状況(令和元年9月2日現在)

	果樹園等			公園・市街地等	初確認年	備考
	うめ	もも	すもも	サクラ		
愛知県	○			○	H24	H25特殊報
徳島県	○	○	○		H27	H27特殊報
大阪府	○			○	H27	H28特殊報
群馬県	○	○	○	○	H27	H29特殊報
栃木県		○	○	(クヌギ樹液)	H28	H29特殊報
埼玉県			○	○	H25	H29特殊報
東京都	○			○	H27	H30特殊報
三重県				○	R元	R元技術情報
奈良県		○			R元	R元特殊報

被害と診断

長野県での発生は、確認されていませんが（令和元年8月現在）、幼虫がウメ、モモ、スモモやサクラなどの生木に穿孔・加害し、枯死させます。被害木は次第に樹勢が衰え、枯死にいたるため、果樹農家にとって脅威となります。幼虫は食入口の外に荒挽きの挽肉状につながったフラス（木屑と糞が混ざったもの）を大量に排出するので（図1、2）、幼虫の加害木を探す時の目印になります。

コスカンバのフラスはクビアカツヤカミキリのものに比べ量が少ない上、糞の割合が多く、全般に赤黒く見えるので識別は容易です。

クビアカツヤカミキリの成虫の体長は、約23~37mm。全体的に光沢のある黒色で、首（前胸背）が赤く目立つので、他のカミキリ類との区別は比較的容易です（図3、4）。

発生生態

(1) 卵

幹や主枝の樹皮の割れ目などに産卵されます。色は白色で、形は長径約6～7ミリの楕円形です。産卵から8～9日後にふ化します。

(2) 幼虫・蛹

幼虫は、樹木内で2～4年かけて成長して蛹になります。関東地方での観察例では夏から秋にかけて老熟幼虫が、脱出孔を作った後で木の内部に蛹室を作り、その中で蛹になります。

(3) 成虫

蛹になった翌年の6月中旬～8月上旬頃、成虫が羽化します。成虫の活動は特に午後、活発になることが観察されています。成虫は樹上をすばやく動き、交尾産卵します。

その他

ウメやモモ、スモモでクビアカツヤカミキリらしい成虫やフラスが出ている木を見つけたら、最寄りの普及センターか病虫害防除所に相談してください。



図1 幼虫が排出したフラス(樹種サクラ)



図2 根元にたまったフラス(樹種サクラ)



図3 クビアカツヤカミキリ成虫



図4 クビアカツヤカミキリ成虫(標本)